

## 大泉桜学園の検証におけるヒアリング記録（教職員）

平成26年9月24日現在

期待された効果	検証項目	内容	対象者
<p>① 9年間を見通したカリキュラムを作成・実施することにより、発達段階に応じた計画的・継続的な学習指導および生活指導の充実を図ることができる。</p> <p>（主に学習指導、体力向上）</p>	<p>9年間を見通した教育課程の編成状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>英語・外国語活動については、共通の理念が担当者同士で話ができていると思える。今の段階ではその程度しか言えない。中学校の英語と小学校の外国語活動では目的が違う。中学校の前倒しを5・6年生でやるわけではない。つながるものが何なのか、小学校と中学校の教員で互いに学べればよいと思う。コミュニケーションが共通のキーワードで、それをどう小中で具体化するかが重要である。</li> </ul>	<p>教員（中学校）</p>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>現在、学習内容については「桜ベーシック」、学習規律や必要な能力については「桜スタンダード」というものをつくろうとしている。</li> </ul>	<p>教員（小学校）</p>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>中学校でどういふことを大切にしているのかを聞いて、それを大切に小学校でも教えられるのは違う。例えば理科は、中学校では推察して結果をまとめることが大事なので、小学校でもそれに長く時間を取るようになっている。算数でも中学校では数式を横ではなく縦につなげていく。また、中学校の国語では語彙力が必要なので、それも早めに行っておく。</li> </ul>	<p>教員（小学校）</p>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>技術科の指導については、図画工作との関連を意識して取り組んできた。図画工作担当の先生と話したり、道具の貸し借りをしたりしている。道具や機械の使い方、安全への配慮は小中でつながっている。小学校で学んできたことを理解でき、効率よく進められたと思う。</li> </ul>	<p>教員（中学校）</p>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>通常の小・中学校と比べて気付いたことは、日常的に互いの取組が分かったことである。例えば、塗装を教えるにも、小学校でニスの塗り方を教えていると分かれば、中学校では違う塗装を教える。穴あけでも小学校でキリを使っていたら、中学校では機械を使ってみるなどということがスムーズにできたと思う。</li> </ul>	<p>教員（中学校）</p>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>算数と数学の接続については、9年間を見通してどうつなげるかを小学校籍の教員と中学校籍の教員が連携して取り組んだ。どこで子供がつまづくかということを見ていくと、分数でつまづくことが多いことが分かった。分からないからいやだという子供の姿が見られた。このため、分数を理解させないといけないということから始まった。</li> </ul>	<p>教員（中学校）</p>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>ベーシックカリキュラム、スタンダードカリキュラムの開発については、数量をメインにして、1年生から9年生を見通してどうやって定着させるかについて検討している。特に分数について行っている。</li> </ul>	<p>教員（中学校）</p>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>教員が忙しくて、新しいことを話し合うのが難しい。低学年は給食時に食育指導、3・4年は保健で環境問題、5・6年生は家庭科、中学生は貧血予防などをやってみたいが授業の時間をもらうのは難しい。食育推進委員会は開かれたことがない。優先順位としては、他にやらなければならないことがたくさんある。</li> </ul>	<p>職員（小学校）</p>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>カリキュラムをすべて研究する時間とはれないが、職員室で話をすることでカリキュラムの理解が進む。理科室の教材の貸し借りや、準備室の冷蔵庫を使うなどのやりとりをしている。子供にとっては中学校の教員というだけで見える目や受け取り方が全然違う。小学校に教えに行くことで、カリキュラムの理解ができて教員にとっても子供にとってもメリットは大きい。時間との兼ね合いである。乗り入れ授業では、小学校では使わないオシロスコープを持ち込んで授業をやった。やってみる価値があるが、大変なことである。全教科でカリキュラム開発をするというのは文部科</li> </ul>	<p>教員（中学校）</p>

期待された効果	検証項目	内容	対象者
		学省の仕事であり、一つの学校でやるのはナンセンスである。	
	4-3-2の区分における発達段階に 応じた計画的・継続的な 学習指導の充実	・ 小学校で学習する範囲には、中学校で出てこない分野がある。例えば、小数と分数の場合、中学校ではほぼ分数で計算する。また、帯分数はほとんど中学校では出てこない。でも数の大きさを把握するために、小学校では教えなければいけない。4年生で帯分数をきっちりやって、5・6年生では仮分数でもよいということにしている。小数は数学では使わなくても、測定値として理科や体育で出てくるので、きっちりやらなければいけない。また、概数も社会では必要になるので、そういった点を中学校の数学担当教員と話している。	教員（小学校）
		・ 4-3-2の区切りについては、中学校選択制のことを考えると、3-3-3の方がよい。	教員（中学校）
		・ プレ7年の授業について、他の小学校からの進学者もいるので中学校の学習内容を先取りした授業はできない。	教員（中学校）
		・ 50分授業や一部教科担任制を体験することは、スムーズに7年生になっていける流れをつくることになる。教員にとっては、50分授業のプラスアルファで復習の時間が取れたりできた。教科担任制を味わうことができた。教科担任制でもっと面白いことができそうだと思う。子供たちにとっては苦痛ということもなく、そんなに変わらないと思う。休み時間も10分ある。	教員（小学校）
	5・6年生の 一部教科担任 制の効果	・ 教科担任制は前の学校でもやっていた。専門性がある教員が授業に携われれば子供たちの学力も飛躍的に伸びるのでいいことだと思う。授業をやると隣の学級の様子も分かるので児童理解が進む。	教員（小学校）
		・ 一部教科担任制については、教員の児童理解が深まる。中学校の教科担任制とのつながりについてはよく分からない。子供たちはあまり意識していないのではないかと思う。中学校籍の教員による授業を受けた国語や理科の方が意識していた。中学校スタイルと言われるだけでくすぐられるものがあるようだ。	教員（小学校）
		・ 一部教科担任制については、中学校に進学して子供たちが教科担任制に抵抗があると感じたことはない。職員室での話を聞くと、社会と理科を担当で分担しているので社会、理科それぞれに力を注いでいる感じである。面白い。教材研究の時間で空きがでる。小学校の教員が同じ授業を2度、3度やって改善できるという機会はめったにない。教員側の変化は大きいと思う。	教員（中学校）
		・ 子供は教科担任制に慣れる。教員も教材研究できるし授業改善できる。	教員（中学校）
	5・6年生の 50分授業の 効果	・ 5・6年生の50分の授業は教員にとってはいい。45分だと授業内でやり足りなかったことや体育の振返りの時間などが授業時間に入れられる。ただ、4年生の授業を5・6年生のペースでやると時間が足りなくなる。	教員（小学校）
		・ 児童にとっては、延長した5分間が長いみたいだ。	教員（小学校）
・ II期の50分授業では、演習問題の時間が取れるので児童にも教員にも効果的である。教員にとって50分授業は全然違う。子供も慣れてしまえば問題ない。		教員（小学校）	
・ 「虹を渡ろう」を始めてから、5年生は50分授業が当たり前だと思うようになり、教員より順応が早い。逆に、転入した教員は、休み時間が今までと微妙に違うのできつそうである。		教員（小学校）	
・ 給食が30分に減って最初は5年生には負担があった。		教員（小学校）	
・ 50分授業はゆとりがあって、最後まで演習問題ができる感じである。また、次の授業までの休み時間が10分あり、		教員（小学校）	

期待された効果	検証項目	内容	対象者	
		授業に余裕があることがよいと思う。初年度は学級が荒れていたこともあって、体育の後は次の授業に間に合わないというようなこともあったが、2年目からは前の時間の授業が次の時間にずれこむことはなくなった。ただ、保護者からは20分の休み時間がなくなったり給食が短くなったりしたことについて意見も出ている。		
		<ul style="list-style-type: none"> <li>5・6年生の担任として50分授業は時間がなくて大変と聞いていた。50分授業自体は慣れるが、放課後が大変だった。20分休みがないので、気が付くと4時となり、すぐ会議に行かなければならない。掃除が放課後になるのでリズムも違う。子供たちは50分授業に慣れていて、理科が2時間続きで実験をやるため、2時間続きの社会は大変そうだった。昨年度は理科を1時間に変えた。</li> </ul>	教員（小学校）	
		<ul style="list-style-type: none"> <li>50分授業の効果については、個人差の方が大きく、何とも言えない。</li> </ul>	教員（中学校）	
	習熟度に応じた指導や補充的な学習などの個に応じた指導等の充実に向けた教員間の協力の状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>4～6年生で算数をみていると、まったく分からない子供をつくってはいけないと思う。7～9年生が見えるので、その後に数学がまったく分からないという状況が見えてしまう。そのため、早いうちから放課後に集めて指導している。将来的に馬鹿なことをしたり不登校になったりしないようにする責任があるので、何とかしていかなければいけないと思う。</li> </ul>	教員（小学校）
			<ul style="list-style-type: none"> <li>算数では6年間の単元を洗い出し、例題を解かせ、つまづきが多いところを長い時間を割いてやるようにしようと思っている。</li> </ul>	教員（小学校）
			<ul style="list-style-type: none"> <li>算数のつまづきを把握することについて、1～6年生ではテストができているが、中学校では数学の担当教員が4人いて、テストでも自分のやり方があり、変えていくのは難しい。そこで、定期考査の結果分析をしている。</li> </ul>	教員（小学校）
			<ul style="list-style-type: none"> <li>小学校籍の教員と連携して課題に取り組むことについて、システムとして5・6年生と7年生で教員の担当が変わる。Ⅱ期については、小中で乗り入れ授業などの方策が必要かもしれない。</li> </ul>	教員（中学校）
			<ul style="list-style-type: none"> <li>出前授業は中学校籍の教員に負担をかけるのでやっていない。</li> </ul>	教員（小学校）
			<ul style="list-style-type: none"> <li>算数の教科書の問題が難しかったので、それに入る前にもう少しやさしい問題をワークション入れてみた。数字を少し変えるだけでもやさしさが変わる。児童はすごく変わったように思う。算数の担当教員と数学の担当教員が月1回、話合いの機会をもっている。</li> </ul>	教員（中学校）
			<ul style="list-style-type: none"> <li>算数から数学へと変わる時のフォローの仕方として、7年生になった時に毎回繰り返して振返りの問題や課題を出すことで、生徒に定着するように工夫している。宿題は5分や10分でもできるようなものを出している。正解しなくてもいいから、考えてやってみるプロセスが大切だと伝えている。</li> </ul>	教員（中学校）
			<ul style="list-style-type: none"> <li>習熟度別指導については、3・4年生から少人数指導担当の教員が入って実施している。グループ編成は小中学校それぞれでやっている。小学校は少人数担当教員が中心である。</li> </ul>	教員（中学校）
			<ul style="list-style-type: none"> <li>小中一貫教育で指導できることの成果については、今までは中学校籍の教員は「何でここでやってこなかったのか。もっとやってほしかった。」と思うことがあったけれど、今はそれを小学校籍の教員に「ここは中学校でしっかりやるから、ここを重点的にやって欲しい」ということをざっくばらんに伝えられる。課題は、どうやってつなげるかということがある。中学校籍の教員は「教科書に赤が入っていないね」と生徒に言われる。中学校にはそういうタイプ</li> </ul>	教員（中学校）

期待された効果	検証項目	内容	対象者
		の指導書はない。若い教員への指導が課題である。若い教員は教科書どおりに指導して、逆に子供たちに伝わらないということがある。その代りに小中一貫教育だと若い教員には子供の学習のつながりが見えやすい。小中一貫教育だと子供の育ちのプロセスが見えやすい。	
		・ 理科の学力向上への効果はすぐには出ないが、小学校の教員にとってメリットがあると思う。	教員（中学校）
		・ 小学校籍の教員から学んだものは、きめ細かさや教材準備、掲示物もきれいであることである。小学校の学習内容との重複も授業で意識するようになった。	教員（中学校）
		・ カリキュラムの面では、資料を活用する力が足りないということで研究した。自分自身も勉強になった。教材についても小学校籍の教員と中学校籍の教員が聞き合えることが重要である。資料集の貸し借りや憲法の学習も小学校でかなり勉強してきていることが分かった。	教員（中学校）
	児童生徒の学習における観点別学習状況の評価や評定の状況	・ 評価をどうするか。中学校では進路に直結するし、保護者への説明責任も大きい。評価規準については、中学校では4月の保護者会で説明する。	教員（中学校）
体力向上に向け指導の充実にかかわる教員間の協力の状況	/		
② 小学校から中学校へ進学する際の段差（学習内容や指導方法の違い）を緩やかなものにし、円滑な移行が図れる。その結果、不登校生徒を減少させることもできる。 （主に生活指導、特別支援教育）	4-3-2の区分における発達段階に応じた計画的・継続的な生活指導の充実	・ 6年生と7年生では、6年生の方がやはり子供っぽい。6年生の子供としてのよさにプラスして、大人に向けた殻を破ったよさ、つまり何ができてなきやいけないのかを教えていかなければならないと思う。	教員（中学校）
		・ 職員室の座席は5・6・7年担当の教員が近いので、7年担当の立場から5・6年担当教員にどういうことが必要かは伝えることができる。	教員（中学校）
		・ 一般的な学校では、中学校には先生が恐いとか、先輩がいるとか、勉強の進度が早い等、身構えや覚悟があつて入ってくる。それがなくなったことが、子供の幼稚化につながっている気がする。例えば、友達関係で言えば、7年生は5・6年生と放課後に遊んでいる。6年生から7年生への成長はなく幼い。	教員（中学校）
		・ 5年生→6年生→7年生と、ホップ・ステップで7年生へとつながっていった、小学生の目線ではなく8・9年生の目線になれば、学級崩壊のようなことだったり大人を馬鹿にしたりする態度は止まるかもしれない。でも教員の間でそういう共通の意見はもてていない。	教員（中学校）
		・ 小中一貫教育校の難点としては、1～4年生で起こったトラブルが7～9年生まで引きずってしまうことである。本人が変わろうと思っても変わりきれない場合がある。悩みの種をもってしまった子供は、それを引きずることになる。	教員（中学校）

期待された効果	検証項目	内容	対象者
		<ul style="list-style-type: none"> <li>今の5年生は4年生の時と比べて意識が違う。2年前から4年生の校舎での卒業式となる「虹を渡ろう」という行事をやっているが、5年生には西校舎に行ったのだからしっかりやるという意識が芽生えている。宿題をやってくるようになったり、持ち物をきちんと持ってくるようになったり、特に女子の場合は先輩への憧れもあるみたいだ。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>上級生が穏やかになった。小さい子供に優しくしているからだろう。また、小学校時代の教員がいるからあまり馬鹿なことができない。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>5・6年生を受け持つと、中学校でどんどん成長していくのがみえる。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>7年生の適応はすんなりいっていると思う。何かあった時に小学校の教員がいることが大きい。あとは、8・9年生をずっと見てきたことによる安心感もあると思う。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>逆に大きな段差を経験していないのが不安である。緊張感がなく、先輩・後輩も友達感覚で7年生が8年生に対等の言葉を使っている。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>中1ギャップへの対応として、本校では5・6年生をパワーアップさせている。本校では4年生から5年生への段差が一番大きいと思う。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>小学生は家庭的な保護者のような役割を養護教諭に求めている。保健室への来室もかなり頻繁で、重症なものは少ない。保健室は安心を与える役割をする。中学生になると大きい怪我の来室が多い。精神的に不安的になりやすい時期でもあるので、今辛いということで来室することもある。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>保健室におけるⅡ期の児童・生徒への対応では、7年生以上は自立をメインに考えている。5・6年生はそこまで求められない。受け止めたうえで、これは自分でできるよねと中学生的な部分を重ねるようにしている。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>Ⅱ期の生活指導で意識していることは、結果として6年生以下の児童であっても中学校籍の生活指導主任が指導に入ることができている。Ⅰ期は担任の役割が大きいので、中学校籍の生活指導主任は入るべきではない。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>5・6年生で中学生に近い問題行動があった時、中学校籍の生活指導主任が指導に加わった。指導する場面でも中学校籍の生活指導主任だけで小学校籍の生活指導主任は出ずに担任が司会して管理職と対応した。中学校籍の生活指導主任として担当教員を5・6年生は理解できるので、指導に加わるべきだと思う。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>5・6年生の顔が見える。何かあれば話しかける。1～4年生は東校舎なのであまり接しない。5・6年生担当の教員は、1～4年生から5年生への接続に課題を感じているかもしれないが、教員は職員室が同じなので1～4年生についても把握しているようにみえる。1～4年生と5年生との接続については、5・6年生の教員に聞かないと分からない。職員室が一つというのは最大のメリットである。すごく大きい。自分のキャリアにとってもすごくプラスである。これがなければ意味がない。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>ペンケースやシャープペンなど、小学校は小学校の文化の中で決まっている。Ⅱ期のきまりは難しいので戸惑っている。Ⅱ期だから統一しなければいけないというのはナンセンスである。小学生にシャープペンがだめというのは、だめなりの理由がある。理由があるならⅡ期で統一する必要はない。小学部は小学部、中学部は中学部でつくっているところである。</li> </ul>	教員（中学校）

期待された効果	検証項目	内容	対象者
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中学校籍の養護教諭は指導的な面が多い。小学校籍の養護教諭はまず手当てだが、中学校籍の養護教諭は手当をしながらも指導している。すごいと思う。</li> </ul>	教員（小学校）
	円滑な移行による安定した学校生活	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小中一貫教育校の利点としては、長いスパンで見えていき、それを生かして子供たちに対応できることである。児童の成長のモデルである中学生が目の前にあるので、小学校籍の教員にも子供たちがどうなっていくのかの見通しが立つ。例えば、7年生で保護者が外で働いたりして家庭環境が変わることによる子供の変化も、3年生の時どういう子供だったかを知っているの、その後の小学生の指導に活かせる。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 滑らかな接続ができていない反面、7年生が幼い。小学7年生に見える。通常、中学生になると廊下でじゃれ合う姿はなくなるが、今はそういう幼い姿がある。その代りに困った行動は起こさないという面もある。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 7年生の学級編成を行う際、児童の実態を7年生の担当教員にかなり密に話したが、伝わりきらなかった面があった。あまり意見は取り入れられなかった。こういう組分けをしてみましたので後は修正してくださいと案を渡した。学級編成を最終決定したのは自分と言われて、なぜこんな学級分けしたのかと言われたのが辛かった。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小学校の学級編成で考慮することは、この二人を一緒にするとうるさいとか、以前にトラブルがあったとか、家庭同士のトラブル、成績、運動能力など子供たち同士の関係である。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 7年生の学級編成において、通常の学校と同様に支援が必要な生徒への配慮については、小学校の時の担任に聞取りを行うが、小中一貫教育校では、それに加えて職員室の話題の中で子供たちの普段の様子が分かる。7年生の学級編成については途中で6年生の担任に見てもらおうなど関与してもらったので、不安な要素を減らして学級編成ができた。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 7年生が実際にスタートして、もうちょっと何とかしなければならないことがあったのではないかと感じた。小学校と中学校では学級編成の考え方が違う。中学校ではどの学級でも同じような授業ができるようにと考えるが、小学校の教員にはそういう発想はない。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 通常の中学校にいた時は、養護教諭として生徒の小学校時代を知りたいと思っていた。小学校の養護教諭に電話することはあったが、小学校の担任と話すことはなかった。情報が伝わるのに時間がかかっていた。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 7年生の学級編成について、6年生の担任の意見を中心に編成したが、中学校の考え方と異なる面があった。翌年からは、中学校籍の教員が中心となって学級編成をした。直接、小学校籍の教員に聞けるし、普段から児童の様子は分かっている。</li> </ul>	教員（中学校）
	不登校や問題行動の状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 早期発見、早期対応について頑張っているが、うまくいかず、発見や対応が上の学年にきている。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中学校の不登校は、今年は1名くらいである。精神面での課題を抱えていて小学校の時から不登校であった。ちょっとした一言で学校に来られなくなることもある。</li> </ul>	教員（中学校）
	全学年における標準服の着用の効果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 5年生の標準服の着用率も、特に女子で高まっている。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ これからは異動してきた教員への説明が必要だと思う。落とし物や忘れ物をした時にどうするのか、標準服のルールはどうするか、それぞれの学校の指導の考えがある。教員ごとに言っていることが違うといけない部分については、年</li> </ul>	教員（中学校）

期待された効果	検証項目	内容	対象者
		度当初の説明によって少なくなるのが一般の中学校である。本校ではそれができていない。文書にして足並みをそろえて共通理解する機会が必要である。	
		<ul style="list-style-type: none"> <li>連携して互いのよさを学ぶというところはある。ただし、例えば標準服というものへの感覚は違う。小学校では服装について指導してきた経験がない。足並みを揃えなければいけないのだろうが、小学校だから何着てもいいじゃないかと保護者に言われると、学校で決めているのだと言える教員もいるが、そうだなと思ってしまう教員もいる。最初のうちは、始業式などの儀式的行事ではこうしてきてくださいと保護者にメールを出していたが、最近は言わなくても標準服に準じた服装で登校するようになった。2～3人くらいは赤いシャツとかで登校したりする児童もいる。</li> </ul>	教員（小学校）
学校の生徒指導に取り組む体制や問題行動への対処の状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>7年生の生徒が生活指導上の問題を起こしたが、5年生の時にも同じことがあり、それを情報提供した。5年生の時を知っているのと知らないのでは違う。同じパターンを繰り返さないようするための指導ができる。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>学力というよりは生徒指導や児童理解の面で進歩したと思う。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>指導が必要な子供について教員同士で情報を共有している。校舎が分かれているので、写真を見ながら子供の情報を共有している。全校で気になる子供のことを共有してかかわっている。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>生活指導の体制づくりについて避難訓練の改善がある。小学生がゆっくり避難しているのを見て驚いた。中学校の指導では校舎を出たら走って校庭へ避難させている。そのギャップは大きい。子供たちには、本当に避難する時のことを考えると、ゆっくりしていいのかと話している。5、6年生は校庭へ出る時に早く出るようになった。3年目になって変わってきた。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>1～6年生が何か問題行動を起こしてしまった時に、中学校籍の教員も入って指導する。中学校籍の教員が入って、子供たちに中学生になると今こうしていることが怖いことになるかと伝えることで、1～6年生の児童に伝わる。保護者にも中学校籍の教員が言うと説得力がある。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>生活指導面における成果は、何かあった時に情報共有しやすいことである。ちょっとでも情報があるだけで違う。職員室が一つであることの意味は大きい。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>生活指導面における課題については、若い教員が自由にやっていると変わっていくのではないかと。ベテランの教員では対応できないことがある。今までやってきたことが生かされないことがある。やり辛さがある。「どうして」と思ってしまう。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>この学校には生徒手帳がない。9年間の学校生活のきまりを入れると大きくなってしまふからである。学校生活のきまりは教室掲示にして、生徒手帳はカード型のものにした。生徒手帳がないと、「ここに書いてあるでしょう」という指導はできない。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>異動当時は、どうやってやるのか興味もあり、不安もあった。5年生から西校舎なので、5・6年生のポジションが難しい。どう手を入れていいのかと悩むところ。学籍や健康診断の対応は小学校籍の養護教諭、日常の対応は中学校籍の養護教諭である。小学校籍の養護教諭ともどうすればいいかと話している。文部科学省の調査などは小学校で対応するし、図画工作などで怪我をした時には東校舎の保健室で対応することが多いので、自分が知らない間に5・6</li> </ul>	教員（中学校）

期待された効果	検証項目	内容	対象者
		年生が怪我をしていることもある。どっちがどうやるというのは曖昧な面はある。	
		・ 保健担当として校外学習などで担当を交替することはあまりない。運動会は西校舎の保健室で対応したが、物の置いてある場所が分からないので東校舎に連れて行くこともあった。	教員（中学校）
		・ 小学生が保健室に求めるニーズと、中学生が保健室に求めるニーズはかなり違う。やはり保健室は二つあり、別々の方がやりやすい。視察にいらした他市の小中一貫教育校の教員から保健室が一つと聞いて、大変だと思った。	教員（中学校）
		・ 月1回の会合以外に連携で配慮していることとして、スクールカウンセラーの先生につなげてもらっている。	教員（中学校）
		・ 小学校から中学校へ上がった時のケアが違うと思った。両方で分かっているから対処しやすい。みんなが知っているので声をかけられる。	職員（中学校）
		・ 給食指導については、小学校の方が丁寧である。	職員（小学校）
		・ 小中一貫教育校の在り方について、教務的には比較的早く理解できた。生活指導的にはいつまでも慣れなかった。小中一貫教育校としての学校のきまりができていなかった。生活指導をどうすればいいのか、1年間分からなかった。	教員（中学校）
		・ 小中一貫教育校の生活指導について、小学校の文化、中学校の文化、いいところは交わればいいが、変わらなくていいところもある。例えば、上履きを貸す場合、小学校では洗って返すが、中学校では放課後に返しなさいということもよくある。洗って後日返すとしても担任の仕事を増やすわけにはいかない。必ず統一しなければならないものでもない。無理に合わせるとどこにしわ寄せがいくか、バランスを考えなければならない。標準服に準ずる服装というが、小学校では一般的に認められている茶髪や化粧など、他の小学校との関係や保護者の感覚もある。何もかも小中学校別に揃えないというわけにもいかない。フアジーな部分がある。発達段階に合わせた指導について時間をかけて理解していく必要がある。	教員（中学校）
		・ 分掌としての生活指導主任は、現在は中学校籍の教員である。小学校籍の生活指導主任は様子をみて合わせてくれているのでうまくいっている。たまたまかもしれない。	教員（中学校）
		・ 保健関係の仕事については、どちらかが原案を作って協議する。健康診断は5～9年は一斉に行っている。学校医は1～6年生と7～9年生で分かれている。できれば一人がいい。耳鼻科の学校医は一緒である。	教員（小学校）
	保護者や地域社会、関係機関等との連携協力の状況		
	スクールカウンセラーや心のふれあい相談員、家庭や地域の関係機	・ 昨年度、スクールカウンセラーが2名に増えた。相談をどこで区切るかということで、一応、1～4年、5～9年で区切っている。5・6年生は今までのつながりもあり、どちらでもいいということで曖昧にしている。カウンセラーは男性と女性である。同性がいい場合など相性もある。情報交換を月に1回、学校生活支援員も入れて行い、情報を出し合っている。	教員（中学校）



期待された効果	検証項目	内容	対象者
	関等との連携協力による教育相談の状況		
	特別支援教育の取組状況	・ 特別支援教育など配慮しなければいけない子供については、7～9年生で顕著になるが、1～6年生の時にそのシグナルが隠れている。小中一貫教育校の場合、早いうちに気付いて専門機関につなぐことができると思う。	教員（中学校）
		・ 特別支援教育については、養護教諭が中心になって、7～9年生のモデルがあるのでそれらの3～6年生の時のシグナルを例として、早いうちに対応したり家庭に意識をもってもらったりすることができている。	教員（中学校）
		・ 特別支援教育コーディネーターの分担については、基本は校舎別である。中学生だけではなく5～9年と幅は広がった。5・6年生の特徴はまだつかみきれていない。5・6年生でもっと手を入れると7年生になってからはスムーズなのではないかと思う。低学年から子供たちがよく見えるのと、前にさかのぼって話を聞けたり資料があつたりするので子供を捉えやすい。	教員（中学校）
		・ 他の小学校から7年生で入学してくる子供へは配慮が必要である。今は学校が落ち着いていて穏やかな子供が多いので、居心地は悪くないと思う。教員が努力している。	教員（中学校）
		・ 小中一貫教育校だからできる指導として、小学校でやっている保健指導を中学校でもやりたいと言っていた。特別支援教育が必要な子供が多い。家庭環境に課題がある子供も多い。生活習慣ができていない子供や朝ごはんを食べない子供、夜にゲームをしてしまう子供、連絡なしで休む子供や不登校ぎみの子供などは東校舎の児童に多い。	教員（小学校）
	児童・生徒の体格、疾病等の状況	・ 体格は良くなっても状況判断は備わっていないということがあつた。体力的にも投げの力は全学年で低い。ボールを取る時もうまく下がれないということを保健体育科の教員と話していた。その課題について小学校籍の教員とは話せていない。	教員（中学校）
		・ 体育は5・6年生が体育館も校庭も東校舎側を使うので、怪我の対応も東校舎で行う。6年生になると大人っぽくなるのは、部活動が影響しているのではないかと思う。	教員（小学校）
		・ 5時以降に残っていると、部活動の怪我の対応があつた。今はやっていない。5・6年生で一息つきたい時に、わざと東校舎の保健室までくる子供がいる。	教員（小学校）
		・ 体格的には昔より成長が早まったと思うが、精神的には昔の方がしっかりしていたと思う。昔の保護者がしっかりしていたからなのだろうか。今は、いろいろなことを学校に聞いてくる。	教員（小学校）
③ 幅広い異年齢集団による活動を通じて、豊かな人間性や社会性の育成ができる。（主に道徳、総合	たてわり活動や合同行事等の異年齢集団活動を通じた豊かな人間性や社会性の	・ 小中一貫教育校ではⅡ期が脚光を浴びているが、それは違うと思う。Ⅲ期が脚光を浴びない限り、小中一貫教育校は興味をもたれない。	教員（中学校）
		・ 10年生・11年生（高校生）というロールモデルがないため、より幼稚化を招いている。8・9年生でも小学生を見ている。8・9年生に次のステップを見せていくことができなければ、社会の期待には応えられない。	教員（中学校）
		・ 小学校では教員全員で運動会をつくり上げていくが、中学校では体育科の教員が主に担当する。小学校ではどの学校もだいたい同じ形の運動会になるが、中学校では教員が変わるとやり方が変わってしまう。中学校籍の教員が大泉桜	教員（小学校）

期待された効果	検証項目	内容	対象者
的な学習の時間、特別活動、進路指導)	育成に向けた指導の状況	学園の今までの運動会のやり方は違うと言い出すと、そこで膨大なエネルギーが必要になる。	
		<ul style="list-style-type: none"> <li>桜祭や運動会では、子供たちにとっては、いかに自分の力を発揮するかが大事である。上級生にとっては、例えば1年生のトイレのお世話をしたり、自分が運動会や桜祭での運営に役立っていたりするという感覚をもつことができる。下級生にとっては、これから自分がどうなっていくかのイメージをもちやすい。難しいと思うのは、中学校は学年のまとまりで仕事をする人が多いので、全体のことや他の学年のことがよく分からない。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>入学式や卒業式については、もともとの良さがいい形で融合している。例年通りということが増えてきた。同時にもう一度考え直してもいいかとも思う。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>今までの小学校での入学式では、2年生の出し物があり、近い年齢なのでそれで雰囲気や和むという感じがあった。大泉桜学園の入学式はそういった意味では他と違うが、他の入学式とは比べようがないため、1年生には分からないと思う。ただ、2年生にとっては出し物がないので、それに向けて準備する機会もなく、残念なことかとも思う。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>保護者はより高い学年の先輩がいることを意識していて、上の学年とかかわるようにして欲しいという意見が出る。小中一貫教育校に反対する保護者の声はずっとあったが、今年の運動会では上の学年の子供が下の学年の子供を手助けするなどの様子について、お褒めの言葉を多くいただいた。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>開校当時は小学校籍と中学校籍の教員の気持ちの違いに戸惑った。これまで経験してきた小学校では特別活動に力を入れてきたところばかりだったが、中学校の教育課程では時間割変更が困難なことを小中一貫教育校になって初めて感じた。小学校は学級担任だから時間割の変更が簡単にできるが、中学校には週3日の講師とかもたくさんいるので。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>行事に対する思いの違いも大きかった。9年生の教員から「今年の9年生は9年生を送る会はいらない」という意見が出たことがあった。6年生を送る会は6年生のためだけのものではなくて、5年生にもおもてなしの心を伝えたり、学級のまとまりを強めたりする機会になるのだが、学校全体の行事として捉えられてないのかとも思った。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>昨年度は5年生を担当していて、5～7年生で飯盒炊さんの縦割り班を組んだ。本当は5～7年生の取組をたくさん行いたかった。保護者から5年生はⅡ期では何で縦割りが少ないのかという意見も出ていた。インフルエンザの流行で昨年度は防災リーダーの活動が十分にできなかったが、準備は一緒にできた。7年生でリーダーを経験できる機会を多く用意できたのはいいことだった。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>4年生はやる気いっぱいなので、6年生の委員会活動と違っていっぱい働く。3年生にも1～3月はインターンシップということで、委員会のお試し体験をさせている。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>防災リーダーの指導は生活指導部ではない。Ⅱ期のリーダーとして7年生は何をしていたかということで、最初は飯盒炊さんのリーダーにした。それだけでは意味がないので防災リーダーにした。</li> </ul>	教員（中学校）
<ul style="list-style-type: none"> <li>交流給食については、ランチルーム使用計画案がある。給食は東校舎が12時10分から、西校舎は12時30分からとなっている。交流給食は西校舎に合わせて12時30分からとなる。低学年は準備に時間がかかるのでそれでよい。一つのテーブルに上下の学年が混ざるように6人で座る。下の学年の子供は質問を考えてきて、上の学年の子供に聞く。話のきっかけをつくるためである。例えば、算数はどうですかという質問を下の学年の子供がすると上の学</li> </ul>	職員（中学校）		

期待された効果	検証項目	内容	対象者
		年の子供が「数学なんだよ」と答えたりする。廊下ですれ違う程度では話せないような会話ができる。	
		<ul style="list-style-type: none"> <li>交流給食は東西の校舎にいる児童・生徒が顔見知りになり、声をかけるようになるきっかけになっており、そのことが学校行事などにつながっている。小学校だけの交流給食だと6年生は1年生を見てあげないといけないという意識がまだ弱い。小学校の児童が中学校の生徒と会うことで中学校のことが分かるようになり、中学校が身近になる。</li> </ul>	職員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>交流給食はどの学年の子供も年2回くらいある。低学年の児童はふれあい給食もある。これは地域の方を招いて給食を一緒に食べる取組である。</li> </ul>	職員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>交流給食は微笑ましい。子供たちは中学生が来るとうれしそうで、誰かのお兄さんやお姉さんが必ず紹介される。中学生も小学生に喜ばれてうれしそうである。</li> </ul>	職員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>ふれあい給食は常連の方が楽しみにしている。ランチルームがあってよかった。</li> </ul>	職員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>児童生徒会、両校舎の委員会活動、飯盒炊さんなどで7～9年生に関わった。子供たちは柔軟で子供たちと一緒に考えていけた。教員の意識がストレートに子供たちに反映される。教員がゴールを見えない中で子供たちにどう言えばよいのか大変だった。昨年は7～9年生が小中一貫教育校の経験者ばかりになり、子供たちにとって当たり前になった。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>東校舎のリーダーを経験している子供は、飯盒炊さんでは頼もしかった。東校舎のリーダーを経験しているからとは言えないかもしれないが。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>桜祭での9年生の歌は王巻であり、子供たちも引き込まれている。大変なのはそこに至るまでの教員の葛藤である。学芸会はなくなったが、学芸会をやりたいという気持ちが保護者にも教員にもある。ホールを借りているので舞台に立った高揚感が全然違う。小学校は舞台で失敗しないように時間をかけて練習するが、中学校は放課後の練習がメインで時間をかけられない。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>運動会や桜祭については、全学年が一緒にやることが決まっていた。もし別々にやるか一緒にやるかを選べたら、どちらがいいかは難しい。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>7年生は5・6年生がいることで先輩としての振る舞いがある。情操教育という面では異学年交流の効果は大きい。下の学年に引っ張られるのも悪いことではない。上の学年に引っ張られて大人びる弊害の方が大きい。後輩がいて、5・6年生が見ているのでちょっと背伸びしている。いい方向で捉えている。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>8・9年生との関係について、一般の中学校では中学3年生は大先輩である。体格がすごく大きい。本校は他の中学校よりは段差が小さい。無駄に大きな隔たりはない。単に仲がいいだけかもしれない。</li> </ul>	教員（中学校）
	5・6年生からの参加を含めた部活動の状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>5・6年生の部活動での怪我が多い。中学生向けの練習をしてしまう教員側の意識もある。やはり5年生は5年生であり、6年生は6年生である。先日野球のバットを振っている子供の後ろを通過してバットが目当たったということがあった。5・6年生だとまだバットを振っている子供の後ろを通らないようにということに気付けないのかもしれない。指導する側が知らなければならぬと思う。</li> </ul>	教員（中学校）
	伝統文化理		

期待された効果	検証項目	内容	対象者
	解教育の実施状況		
	命の大切さや環境の保全などについての指導の状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>道徳教育について9年間を見通したカリキュラムを立てたが、その効果を実感しないまま異動した。命の教育に全員で取り組んだのは良かった。</li> </ul>	教員（小学校）
	自ら考え、自主的・自律的に行動でき、自らの言動に責任を負うことができるような指導の状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>Ⅲ期の成長を支える取組は難しい。5～7年生という一つの形にプラスして、キャリア教育で将来の夢を語らせていくということが必要ではないかと思う。</li> </ul>	教員（中学校）
<ul style="list-style-type: none"> <li>地理的な条件が関係するが、近隣には埼玉県の高校がたくさんある。実技系・国際系・普通科がそれぞれあるし、次の10・11年生を見せるには格好の場所である。都道府県の壁はあるが。</li> </ul>		教員（中学校）	
<ul style="list-style-type: none"> <li>4年生のリーダー性については、4年生でも委員会の委員長や縦割りの班長が意外にできる。しかも4年生は5・6年生よりやりたがるので、教師もやりやすい。</li> </ul>		教員（小学校）	
<ul style="list-style-type: none"> <li>I期の指導上の成果について、4年生が中心になって学校をまとめていくことができることが分かったのが成果である。1～4年生だと、学年の差が近いので、1年生にも自らの成長の形が見えやすい。3・4年生は心の成長が大きいと思う。それで5年生に上がり自己有用感が高いままなので、児童・生徒会の立候補も多い。自分たち教員の驚きが一番大きかった。課題はあまりない。1～4年生についての引継ぎはたぶん大丈夫である。</li> </ul>		教員（小学校）	
<ul style="list-style-type: none"> <li>5～7年生の指導が昨年度と今年度のテーマである。7年生の防災リーダーを始めたが、昨年度始めたばかりなので、まだ手応えは分からない。ただ、飯盒炊さんは7年生がリーダーでもできることが分かった。期のリーダーとなる機会をしっかりと用意しないとけない。</li> </ul>		教員（小学校）	
<ul style="list-style-type: none"> <li>開校した4月1日から、経験したことのない慌ただしさだった。スタートは9年の副担任、7月から担任となり子供との関わりが増えた。子供も小中一貫教育校に対する戸惑いがあった。特に最初の9年生。子供は案外、保守的なので、今までやってきた運動会を念頭に、こういう運動会をやるのではというのがあったと思う。子供にとってどうなのかと思った。</li> </ul>		教員（中学校）	
<ul style="list-style-type: none"> <li>Ⅱ期の効果として、小学校から中学校への段差を緩やかにする効果は大きい。しかし、成長過程に必要なステップという面もある。どこにねらいをもつかによって違うと思う。</li> </ul>		教員（中学校）	
<ul style="list-style-type: none"> <li>段差を乗り越える力としてⅡ期をどうするかは課題である。飯盒炊さんや防災リーダーで7年生をⅡ期のリーダーとする機会を設けようとはしているが、設定が難しい。中学校選択制の問題もある。通常の小学校よりも6年生段階でのリーダーの経験が少ない。今の8・9年生では、他の小学校から入ってきた生徒の方がリーダーになっている。</li> </ul>		教員（中学校）	
<ul style="list-style-type: none"> <li>行事では、本番で失敗しないようかなりの練習をし、それでいて「自分たちでがんばった」と子供たちに思わせることで達成感をもたせようとしている。でも、8・9年生の教員が指揮すると、リハーサルが少なく本番でうまくいかなかったりする。教員が今日はこれをさせようという方針をもたずに進めるので時間がかかる。小学校では最初</li> </ul>	教員（小学校）		

期待された効果	検証項目	内容	対象者
		に今日一日ではこういう練習をすると方針を決めていて、できるだけ下校時間を早くしようと努力をするが、下校時間が6時半とかに延びてしまったりしていた。でも、特別活動に力を入れていた中学校籍の教員が開校してから2～3年目に着任して、「それは違う」と言ってくれて背中を押してくれた。	
		<ul style="list-style-type: none"> <li>行事を通した子供たちの成長の変化について、中学校入学は子供たちにとって大きな変化になるはずで、よい部分は大きい。大泉桜学園の場合、再スタートできないという部分はあるだろう。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>9年間を通しての成長については、リーダーを3回経験するチャンスがある。大きな課題になったのはⅡ期である。1～4年生は小回りがきくので結束が強くうまくいった。8・9年生も大丈夫だった。逆にⅡ期は、5・6年生と7年生になってしまった。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>一番迷惑をかけてしまったのは今年の9年生である。大泉桜学園の開校時が6年生であり、9年間の間にリーダーを1回しかできない学年になってしまった。縦割りで下の学年の面倒を見る機会が少なかった。7・8年生の頃は、リーダーを経験してこなかったことで、人前でマイクを持たされてももじもじしてしまったりして、担当教員が苦労したみたいである。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>4年生を担当した時は、いろいろ経験させようとした。校長から2分の1成人式ではない何かをしようという提案があり、「虹を渡ろう」という行事を企画した。その年は年間を通じて、学級通信の名を虹色通信にするなど、虹をテーマに取り上げた。6年生を指導するつもりで4年生を指導した。その後、自分も5年生を担当したので、4・5年生とつながりをつくれた。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>大泉桜学園では、7年生に対する意識が違う。5・6年生へのリーダーだという意識がある。中学校1年生ではなく下の学年がいる7年生という意識をしていることが大きい。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>進路指導に関する取組についての課題としては、受験勉強という雰囲気にならないことである。10月、11月になっても高校のことを知らなかったり、学校を見に行っていなかったり、自分の学力を分かっていない生徒や生徒のことを見ていない保護者がいたりすることもある。今年は生徒と保護者に、生徒の学力に合った高校を見に行くように指導した。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>4年生におけるリーダーの経験という点では、課題の多い子供が多いと昨年度はこれでリーダーをやってきたのかと疑問になることもある。学年のカラーがある。Ⅱ期はずごく大切だがどうやったらいいのか考えてしまう。何を身に付けさせたいか共通理解がされていない。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>7年生と今までの中学校の1年生を比べて、中学生になったのだからということを経験側が意識して言い聞かせていることもあり、しっかりしている。小中一貫教育校は節目がないと言われるが、そんなに感じない。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>5・6年生は曖昧な区分については、ケースバイケースで選べる方がいいのかもしれない。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>4－3－2の区切りについては、9年間で健康観をどう身に付けさせるかということを考えなければいけないと思う。5・6年生を小学生扱いせず求めればいいのか、できるとしても求めることがいいのかは分からない。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>中学校が考える特別活動とは、ゴールは一緒だけど入口が違うだけだったと結果として思う。小学校は行事で育てて</li> </ul>	教員（小学校）

期待された効果	検証項目	内容	対象者
		いく。中学校は高校受験がゴールで授業時数の問題もある。小学校は児童の全体を育てあげていくが、中学校はトップの生徒を育てて引き上げる感じである。生徒会のスケジュールが分からなかった。1年生を迎える会が必要か、何年生が中心になるかなども分からなかった。対面式や部活動紹介、部活動の仮入部期間などを考えなければならない。	
		・ 小中一貫教育校の開校前後における子供の育ちについては、中学校3年生（9年生）が一番上という意識は変わらなかった。もともと大泉桜学園の子供たちは優しい子供が多い。中学校から入っても優しく迎えてくれる。1～9年で行動することが多いので、何かを計画する時に1年生にはこれは分からないのではないかなどと7～9年生が想像することができるようになり、視野が広がった。	教員（小学校）
		・ 4-3-2の区分について、4年生は伸びているが5～7年生はもう少し耕さないといけないと思う。5年生で区切るというのもある。	教員（小学校）
		・ 5～7年生を引き上げるために、行事となると授業時数の問題がある。細かいところでも活躍できる機会があるといい。児童生徒会の役員選挙では、落ちるのは怖いけど、4年生では全員で頑張ろうという指導だったので、その勢いでたくさん立候補すると活性化する。なかなか立候補が出なくて、各学級で教員から声をかけてもらった。	教員（小学校）
		・ 5～9年生の児童生徒会役員会のリーダーは引っ張っていた。いずれそうになりたいという憧れはある。部活動と両立したいので、時間の切り方やローテーションを子供たち自身で工夫していた。異学年の集団として成長していた。	教員（小学校）
		・ 児童生徒会担当の教員の意識として、児童・生徒に求めることは同じである。小学校としてはどうか、中学校としてはどうか、これで動けるかと確認しながら進めた。7～9年生の力は大きい。先輩の意見で動く良さもある。	教員（小学校）
		・ 6年生のリーダー性については、経験する場は足りない。4年生を経験してきた6年生は前向きさが違う。今の8年生は4年生でリーダーの経験がなく、認められる場面が少なかった。経験しているとリーダーをやってもいいかと思う。7年生で飯盒炊さんを実施した時はみんな前向きだった。役割があれば前向きになれるとも思った。	教員（小学校）
		・ 6年生を送る会をしてもらっていない学年もある。初めは4年生を東校舎から送る会である「虹を渡ろう」の取組はなかった。	教員（小学校）
		・ 卒業式後のプレ7年生というのは何とも言えない。卒業式をやってもまたあるという気持ちになる。なくてもいいかとも思う。普通の授業で中学校籍の教員に教えてもらっているので、卒業式が終わった後にまたというのが課題だと思う。	教員（小学校）
		・ 現在のⅡ期の子供は開校時に東校舎を経験している子供だが、一般的な5・6年生としての学校生活を知らないので比較はできない。	教員（中学校）
		・ 4年生の時に東校舎のリーダーとして引き上げてⅡ期を迎えることについて、自分は東校舎の委員会活動が見えていない。東校舎から西校舎への接続性は難しい。委員会活動の役割は大きいですが、どう活かせるかが難しい。東校舎の放送委員会と西校舎の放送委員の比較や接続、発展がない。それぞれ担当の教員がいて活動している。時間がないが、それをやらないとつながらない。	教員（中学校）
		・ 4年生は成長を感じる。いろいろなことができる。	教員（小学校）

期待された効果	検証項目	内容	対象者
		<ul style="list-style-type: none"> <li>小中一貫教育校としてこういう9年生を育てたい。ではそのためにどうするかと考えられたことは大きい。小中一貫教育は現在勤務する学校でも始めたが、まだその視点も持っていない。9年生の進路が決まると、小学校籍の教員もおめでとうと手を叩いて祝ったり、普段から声をかけたりと小中一貫教育校の良さを感じる。小さい子供がいるから生徒はあまり馬鹿なこととはできない。お手本にならなければならないという意識はあった。交流給食でも自然に話しかけたりしていた。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>7年生について、中学校への進学でリセットできない。中学生になったら頑張ろうという意識は違う。6年生でリーダーの体験をしていない。7年生はⅡ期のリーダーとしていろいろな分野で先頭に立たせて役割を与えた。期別朝礼、防災訓練など役割を与えれば成長する。小学7年生と言われた部分が変わってきた。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>8・9年生の成果として、9年生は学校全体のリーダーとしての活動がある。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>開校時は6年の担任だった。5年生からの持ち上がりだった。戸惑ったまま一年間が終わってしまった。申し訳なかった。自分も説明しきれなかった。子供たちの感想としては否定的なものではなかったと思う。20分休みがなくなってしまったことくらいである。発散する場がなくて、はじけきれない感じだった。もう西校舎のメンバーだから大人の行動をと子供たちには話していた。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>6年生が7・8年生となった姿を見て、心配していた子供が活躍している姿をみると嬉しい。心配していた子供が心配な行動をとっていると声がかげられる。昔のことを知っている教員が声をかけると安心するのではないかと思う。遅刻が常習の子供が校門から入って歩いているのを職員室から見ていると、あわてて走ったりしていた。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>一般の小学校卒業生との違いとして、大泉桜学園の7年生はやや幼い、小学7年生という感じがかった。中学生になったという感じがあまりない。久しぶりに見る感じがなかったかもしれない。いい意味では優しさが残っている。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>特別活動の面で何かうまくいかない、何だろうと分からないまま過ぎてしまった。ねらいとするものが5・6年生と7～9年生では違うのかもしれない。4年生でいきなり委員会のリーダーとなる。5・6年生が委員会活動をしていたころは5年生がサブで6年生がリーダーになる。リーダーとサブという関係がないので敬うということがなく、関係が親しくなり過ぎる感じもあった。言うべきことを言う力が付かないのかもしれないという気がした。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>4年生に対する指導は、東校舎の頂点というところを意識した。4年生段階のリーダーシップのとり方があると思う。4年生では、自ら考えて行動するということまではいかない。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>4年生で力を付けるという指導計画をつくるので4年生で力は付くが、6年生ではだめなのか、4年生でそういう力を付けさせるのがいいことなのかは分からない。4年生に6年生と同じものを求めてはいけないが、やりようだと思った。4年生の委員会活動は1年間だけなので、ちょっと短い気がした。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>I期は4年生がリーダーということを教員も意識して指導している。Ⅱ期は7年生の防災リーダーがあり、12月に向けて昨年度よりもグレードアップしている。課題は8・9年生をどうするかである。受験のこともあるし、卒業論文を書くという取組もある。協力したいと思う。</li> </ul>	教員（小学校）
	特別支援学		

期待された効果	検証項目	内容	対象者
	校の児童生徒との交流及び共同学習の状況		
④ 小学校の教員と中学校の教員の相互協力関係が今まで以上に構築でき、学力や体力の向上等の高い教育効果を上げることができる。 (主に学校運営)	小・中学校教員の相互協力関係の構築	・ 小中一貫教育校について、開校時のすり合わせの時代に立ち戻る必要はなく、これからは、今いる子供たちをどうしていくのかという視点で、教員同士で話ができればいいのではないかと思う。	教員 (中学校)
		・ 小学校籍と中学校籍の教員が連携することについて、9年間を通して考えられることが大事なので、小学校6年間というゴールと中学校3年間のゴールではなく、1本のゴールになったので考えやすくなった。	教員 (中学校)
		・ 本校の中学校籍の教員は協力的である。小中連携もやったことがあるが、その時は大変だった。その時の中学校の教員は「なんでやらなければいけないの」で終始した。授業も見せたくないという感じだった。最近、大泉桜学園に転入した人で年齢が高い人には小中一貫教育は苦しいと思う。	教員 (小学校)
		・ 開校前の準備の大変さを知らない教員が増えてきた。例年通りが増えてくると、改善の余地も増える。	教員 (中学校)
		・ 教員として得たものとして、小学校籍の教員の日常の様子を見ることができた。勉強になった。それぞれがそれぞれの場面で必要な指導を行ってきた。	教員 (中学校)
		・ 最初の年は、職員会議の提案の前に一人一人の教員に話を調整をしていた。でも今は、小学校と中学校の間に線がある感じがしない。こちらの思いが分かっていただけ。特別活動を計画する際に楽しくなった。開校当時の苦しみを知っているから仲良しというもある。	教員 (小学校)
		・ 11月に来た時には、開校まであと少しだということで、調整しなければならなかったことがたくさんあった。標準服、門の扱い、保護者対象の100ぐらいのQ&A作成、一つにした組織の作成など。教育課程を編成する時には、1～9年生までであるので、月行事の予定表が変わってしまう。名簿も小中学校9年間の様々な名簿を作るが、中学校籍の教員は家庭数という言葉が知らなかった。電話番号検索で兄弟姉妹関係が名簿で全て分かるようにした。地区班や登校班を手作業で作るのも大変で、中学生は入っていなかったのをそれを足した。他の人が気付かないことを言われた時にやるのが大変だった。職員室のレイアウトも、机の間隔などを事務室で打合わせをしながら作った。	教員 (小学校)
		・ 管理職の中でも、小学校籍と中学校籍でどれだけのこと分かっているかの探り合いをしながら進めていった。	教員 (小学校)
		・ 小学校と中学校では、学級担任制と教科担任制に派生する考え方の違いが大きい。運動会では、中学校籍の教員は学級の生徒たちとつながりたいと思うが、小学校籍の教員は学級にとらわれずに紅白に分ける。音楽会でも、中学校ではコンクールにしたいと思っている。中学校は学級を分解する発想がなく、職員会議でも学級対抗に戻したいという雰囲気は大きい。学校全体の一体感としては、1～9年生全体でやったほうが良いと思う。ここ数年はこのやり方が定着するようになった。	教員 (小学校)
		・ 副校長3人の仕事分担について、大雑把に学年の分担と分掌はあるが、互いに任せきっているわけではない。ただ、テレビ局の取材が来るなど、誰がどうしたらいいかわからない仕事は統括する副校長に回ってくる。一人での副校長	教員 (小学校)



期待された効果	検証項目	内容	対象者
		経験がない人には、仕事を教えたり仕事を任せたりしている。	
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中学校籍の副校長の仕事についてはよく分からない。教科担任制では考え方が違う。一番違うのは時間割についての考え方である。最初の桜祭では、小学校では音声ということで国語の時間を使って練習したりできるので、予定より小学校の子供たちが練習していて、中学校籍の教員が怒った。小学校と中学校の考え方の違いについて気を付けていないとふと出てしまう。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 5年生の給食の時間が短くなることについて、5年生には短くなったという意識がないので、準備に時間がかかって食べる時間が少なくなってしまう。もう少し長いといいと思う。せめて5・6年生だけでももう少し給食の時間が長いといいと思う。教室移動があるとさらに短くなってしまう。各階に給食配膳室があり給食を取りに行くのだが、西校舎からは遠い。遅い時は5年生に届けに行くこともある。</li> </ul>	職員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 給食の時は全学級を栄養士2名で回り、声をかけたりする。全員とはいかなくても、食の細い子供などには目が向く。</li> </ul>	職員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 朝のミーティングは給食調理員全員の10名で行う。味見は2名の栄養士で行う。</li> </ul>	職員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 開校時に着任するまでは、都では学校に限らずいろいろなところにいたので、一般の小・中学校と比べてどうかということが分からない。普通の小学校では都費の事務主事は一人だが、ここは二人なのでやりやすい。もう一人の事務主事と知っていることが違うので、話し合って仕事ができる。一人配置の場合は、事務連絡会や知っている事務主事の人に聞くしかない。</li> </ul>	職員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 開校前から経緯を知っていればいいが、開校と同時に異動してくると何も分からない。通帳をつくるにしても調査に回答するにしても、学校名はどれを使うのか、給与の振込も小中学校が別々で、住所も小学校として出す時は旧住所で出し、小中一貫教育校は中学校の所在地で出すなどややこしい。</li> </ul>	職員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 異動してくる時に、小中一貫教育校とはどういう学校なのか研修をして欲しい。心構えができる。</li> </ul>	職員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 栄養士が二人いるので、どちらか休んでも対応できるので助かる。</li> </ul>	職員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大泉学園中学校、大泉学園緑小学校と3校で話をした時、大泉学園中学校の教員が「掃除の仕方をしっかり教えて欲しい。雑巾は投げるものじゃないし、箒はチャンバラするものではない」と発言された。その時、本校の中学校籍の教員が「私たちもそう思っていた。でも小学校の時はずっと丁寧に掃除をやっている。けれども中学校になるとそうになってしまう。そこをどうするかを考えなければならない」と言ってくれた。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 平成23年度は聞いていたとおり、学校種の文化の違いがあって大変だった。平成24年度は少し分かり合えた。平成25年度はだいぶ分かってきた。平成26年度はとてもしやすくなった。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中学校のあり方を見直すきっかけになったこととして、定期考査の後に全員を残して勉強させるのと、自分で計画させて勉強するのとどちらがいいのかということである。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 開校前の準備では、何時間話しても何も決まらない会議があった。決めようとしているのにもどかしい。互いを知らなかったので決まらなかった部分があった。開校前に話していた時は「もっとフレキシブルになればいいのに」と思っていたが、職員室が一緒になって、だから譲れないのかとやっと分かった。例えば、定期考査の採点が大変と聞い</li> </ul>	教員（小学校）

期待された効果	検証項目	内容	対象者
		てはいても、開校前には何とかなるのではないかと思っていた。職員室が一緒になって目の当りにすると、大量のテストを次の授業までに採点しなければならないのはやはり大変であり、成績にも関わってくるのが分かってきた。職員室が一緒になって初めて分かることが多い。現在、在籍している小学校は隣の中学校との連携を目指しているが、近くても学校の様子が全く見えない。	
		<ul style="list-style-type: none"> <li>開校時の自分の写真をみると、とても険しい顔をして仕事をしていた。ゼロからという必死さがあったと思う。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>小中一貫教育校になって教員の変化については、初年度からぎすぎすした感じはなかった。6年生担当教員の隣の席は7年生担当の教員だったので、やりとりできたのはよかった。「小学校の教員はこんなことしてるの。」などという会話があった。中学校籍の教員の動きを学ぶいいチャンスだった。開校前は、実態を知らないから想像で話していて、楽をしようとしているのではないかなどと悪口になってしまっていた。大きな声で指導するとか、なんでこんな指導するのだろうかと思っていたが、中学生たちは声変わりもあって大きな声を出さないと教員の声が通らないとか、毅然とした態度で臨まないとめめられてしまうとか、様々な意図があったことが分かってくる。互いに配慮して仕事ができきたと思う。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>小中一貫教育校の仕事の進め方について、小中一貫教育校になって仕事が増えたということはあまりない。連絡調整は増えた。6年分の調整よりは9年分の調整の方が大変である。全員で集まりにくいとか話が伝わりにくいという面はある。東校舎と西校舎で違う時間が流れている感じはある。</li> </ul>	教員（小学校）
	校内研究の実施状況と小中一貫教育の研究	<ul style="list-style-type: none"> <li>平成27年1月に大泉桜学園の研究成果に関する報告会があるが、その後に人事が大幅に入れ替わり、大泉桜学園を立ち上げてきたメンバーがいなくなる。今は教員が一つの方向を向いているけれど、異動してきた人が小中一貫教育であることをマイナスにとらえていると、ベクトルが一つの方向を向かなくなる危険性がある。現校長はブレない人だが、次の校長と一部のスタッフは大変だと思う。ここまではうまく回ってきたが、ここから先が正念場になる。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>中学校籍の教員は他の教員に授業を見せないし、数学の教員は国語の教員に意見を言えないという不文律がある。研究主任として、研究での連携と進め方については、そこを崩すのが大変だった。最初は小学校が中学校の、中学校が小学校のというように互いの授業を見合うところからスタートした。ここ最近、中学校籍の教員が教員同士で話ができるようになったので、ようやく教科ごとのグループをつくった。でも教科ごとにやるとそれぞれで視点がずれていくので、桜ベーシックや桜スタンダードをつくらうとしている。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>意見交換は、特に若い教員にとって研修的な意義が高い。今後、異動してからも生きると思う。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>指導計画さえここで作っておけば、異動で前からいた教員がいなくなっても、そんなに悪くはないだろう。それが自分の異動までの最後の宿題だと思っている。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>特色ある教育活動をしているが、新しい教員が転入してきて当初のねらいとずれてくるのが懸念される。今の教育を完成させることが大事だと思う。そうすると、新しい教員にもよさが分かる。</li> </ul>	教員（小学校）
	学校組織（校長1名・副校長	<ul style="list-style-type: none"> <li>特別活動部は大泉学園桜中学校にはなく、生活指導部の中に特別活動が含まれていた。小学校は特別活動の分掌がないとできないのでつくってもらった。それを理解してもらうのに時間がかかった。</li> </ul>	教員（小学校）

期待された効果	検証項目	内容	対象者
	3名体制)、兼務発令、校務分掌、組織体制、用務、施設管理、給食、事務、諸会議の運営等の小中一貫教育校としての運営状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>小学校籍、中学校籍の教務主任が連携することについて、自分は中学校の進路指導については分からないし、中学校籍の人は小学校の学級担任制のことが分からないので、連携は必要である。校庭を使う時や共通の行事、学校公開などの時間割の調整は密にする必要がある。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>教務主任が二人いるのは、分業など便利な部分もある。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>2校目の小中一貫教育校を作るという話があるが、大泉桜学園をコピーしたのではうまくいかないと思う。大泉桜学園のやり方の提示はできるが、条件に合わせた違うやり方が必要になる。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>5・6年生と7年生の教員の連携について、1・2年目は溶け合わない。行事を回すことで精一杯だった。ここ2年はⅡ期で食事会も行くようになった。職員室の席も近くなり話し合っている。今の7・8年生は自分が指導した生徒なので、生徒をはさんで話ができる。子供が淋しそうにしていたら声がかげられるし、7・8年生の教員に伝えられる。保護者にも長く見ていたので話しかけられる。7年生の臨海学校に付いて行ってもいいくらいである。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>教務部の事務的な作業としては、やらなければならないことは同じ。小中一貫教育校として、通知表の様式や評価・評定の6年生から7年生への段差を緩やかにしようと検討している。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>事務体制については、都費の事務職員が2名、区の非常勤職員が1名、臨時職員が2名の計5名体制である。</li> </ul>	職員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>日常的な管理については難しさをあまり感じていない。最初は広すぎてどうかと思ったが、事務主事二人で相談しながらできるのでいい。</li> </ul>	職員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>東京都は事務の共同実施ということで、都費の事務職を各学校に置かない方向を考えている。すでに武蔵村山市などでは始めている。</li> </ul>	職員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>校長や副校長とのやりとりについて、最初は大変だった。副校長が3人いて、教員間での分掌はあったものの、誰に印をもらえばいいか分からなかった。今は統括する副校長にまず持っていくようにしている。</li> </ul>	職員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>意思決定の在り方については、毎朝打合わせをしていて、起案文書で処理すること以外に課題があった場合には、校長からの指示で副校長が動いている。起案文書は副校長も全員見て校長に提出している。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>委託業務に関する副校長の分担について、私は用務と施設管理を担当している。給食については、他の副校長が家庭科の教員なので、細かく献立に指示をしている。給食の異物混入など大きな問題が起きた時は、担当を越えて動いている。誰かが休みの時は、互いの仕事を補完している。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>副校長の役割分担について、どの副校長の担当なのか分からない場合は、今では副校長のどなたかの机においておくと、担当の教員にまわしてもらえる。</li> </ul>	職員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>開校前の準備では、実行委員会の教員が20分休みも使ってよく打合せをしていた。中学校の分掌には特別活動部がないので、中学校の分掌のどこに重なるか、組織をどうするかについて実行委員会で話していた。特別活動部が決まったのは冬ぐらいだったかと思う。</li> </ul>	教員（小学校）
<ul style="list-style-type: none"> <li>調整で苦勞した部分として、企画を立てるだけでは通らない。やってもらう学年や関連する学年、各部署の教員にも知ってもらわなければならない。それぞれからいろいろな声が返ってくる。</li> </ul>	教員（小学校）		

期待された効果	検証項目	内容	対象者
		<ul style="list-style-type: none"> <li>小中学校の教員が一緒になってよかったのは、互いの仕事内容が見えて人間として話げできた。ゴールは15歳、スムーズに指導していけるように小学校で押さえることが理解できた。読み書きそろばん、基本のところはとても大事であり、後から戻れない。どの学年になっても大事である。5、6年の担任をすると送り出した後の7～9年生が目の前にいるので、力が付けられてなくて申し訳ありませんという感じであった。中学校籍の教員には、小学校でも繰り返し指導してきたけれど定着しない面があるということは理解してもらえた。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>行事の考え方が違うことを行事ごとに感じた。小学校籍の教員は細かく計画を立てて十分に打合せをする。中学校籍の教員は大雑把で文書を読んでも聞かないと分からない面があった。避難訓練の文書の作り方なども変わってきた。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>月に1回、学校生活支援員と養護教諭が参加する特別支援委員会と担当教員だけで行う教育相談委員会を開いている。</li> </ul>	教員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>準備段階の苦勞として、時間の調整が何より大変だった。初年度はすでに年間計画ができてい中で会議の設定をしなければならない。結局4時過ぎからの話し合いだが、なかなかまとまらない。月1回ぐらいの企画委員会があった。中学校の教務主任と小学校の教務主任が日程調整をした。1年間準備をした後、特に小学校では、異動で大幅に教員が入れ替わってしまった。また一から話し合いみたいになった。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>行事の検討は、互いの文化がある中でどうすり合わせるかであった。校長に相談して、じゃあ私が行ってくと校長が相談してくることもあった。校長同士で相談して決まった後で動いた。運動会は学級対抗ができないことへの不満があった。目的自体が小学校と中学校で違う。小学校では学芸会がなくなった。今までの流れや教育観の違い、授業時数の考え方も小学校と中学校で違う。中学校では前もって授業カットを決めないといけない。急には対応ができない。行事に向けた練習も、小学校は足りなければもっと練習をと言うが、中学校は言われてもできない。試験の後に授業を実施すること、避難訓練で授業をカットすることなど隣の中学校との違いもある。中学校では避難訓練は紙上訓練をすることもある。健康診断も一人ずつ授業を抜けて帰ってくるので授業カットにしなくて済む。他の中学校ができていのになぜ小中一貫教育校だけできないのかとなる。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>小中一貫教育校としての教務主任は小学校籍の教員が勤めている。二人で調整してから管理職に相談した。互いのことを知らないと計画ができない。小学校のことを知らなかった。どういう思いで何を大切に、何を目的にやっているのかが互いに分かると、じゃあ9年生の進路指導における面接時には、今後予定を入れないようにしようとかができる。1年間やってみて、運動会も一部学級対抗を入れるようにして、定期考査前には予定を入れないとかの調整をしていった。開校時には準備が間に合わずに見切り発車した部分がある。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>副校長3人の体制について、教務、進路指導、生活指導と副校長の担当が分かれています。小学校籍の副校長に生活指導の相談をしても副校長によって回答が違うこともあり戸惑う。最終的には副校長同士で相談してもらったりした。各期の担当はあるが、II期の副校長はどれだけ小学校や中学校のことを理解できるかが課題である。</li> </ul>	教員（中学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>一体化した分掌業務として転出入の様式を統一した。小学校の教務の方が進んでいてよかった。職員室が同じなので意思疎通が進んでうまくいった。職員室が分かっていたらうまくはいかなかった。扉一枚でもしきりがあると敷居は</li> </ul>	教員（中学校）

期待された効果	検証項目	内容	対象者
		高い。	
	学校の財務 運営の状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>小中一貫教育校の事務について、予算は準備段階で困った。教育委員会に質問状を作って提出したが、区では予算が小学校費と中学校費が分かれている。品川区の場合は教育費として一つになっている。職員室で使うものはどちらで買うのかという問題が出てきた。今は、消耗品は中学校費、芝生など小学校限定のものは小学校費で出している。</li> </ul>	職員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>1・2年目で大変だったことは、区で小中一貫教育校の認知度が低く、予算配当が変なところに入っていて執行できないことがあった。また、備品台帳を一つにしてもらえなかったので、何度も区にお願いした。</li> </ul>	職員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>学校納付金について、1年生でデータを登録すれば9年生までゆうちょ銀行で引き落としされるシステムにしたが、7年生の保護者は改めて審査があるのに就学援助の申請を忘れて、未納になってしまうケースがいくつかある。</li> </ul>	職員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>給食費については、7年生以上の保護者は経験をしてるので未納が少ないが、低学年に関しては未納が多い。</li> </ul>	職員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>大泉桜学園には標準服の補助金もあるので、副校長に周知用の手紙を作ってもらったりした。</li> </ul>	職員（小学校）
		<ul style="list-style-type: none"> <li>就学援助は中学校に入る時に申請し直さなければならないが、同じ学校なので自動継続と思われている方がいるのかもしれない。教育委員会事務局で対応してもらいたい。</li> </ul>	職員（中学校）
⑤ 地域社会と連携した特色ある学校づくりを推進し、魅力ある学校とすることによって、保護者や地域社会からの信頼を得られる。その結果、学校と地域社会の活性化を図ることができる。 (主に保護者、地域)	地域社会と連携した生涯スポーツの推進		
	地域社会との連携と小中一貫教育校による学校・家庭・地域社会（避難拠点、青少年育成など）との連携状況		
	P T A 組織や学校評議員会の状況		
⑥ 施設整備における効果と課題	職員室、東校舎・西校舎、渡り廊下、校庭、ランチルーム、	<ul style="list-style-type: none"> <li>(再掲) 5・6年生の顔が見える。何かあれば話しかける。1～4年生は東校舎なのであまり接しない。5・6年生担当の教員は、1～4年生から5年生への接続に課題を感じているかもしれないが、教員は職員室が同じなので1～4年生についても把握しているようにみえる。1～4年生と5年生との接続については、5・6年生の教員に聞かないと分からない。職員室が一つというのは最大のメリットである。すごく大きい。自分のキャリアにとってもすごく</li> </ul>	教員（中学校）

期待された効果	検証項目	内容	対象者
	多目的室、プール、体育館、学習室、保健室、相談室、個別学習室、学校図書館ほか	<p>プラスである。これがなければ意味がない。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ (再掲) 生活指導面における成果は、何かあった時に情報共有しやすいことである。ちょっとでも情報があるだけで違う。職員室が一つであることの意味は大きい。</li> <li>・ (再掲) 開校前の準備では、何時間話しても何も決まらない会議があった。決めようとしているのにもどかしい。互いを知らなかったので決まらなかった部分があった。開校前に話していた時は「もっとフレキシブルになればいいのに」と思っていたが、職員室が一緒になって、だから議れないのかとやっと分かった。例えば、定期考査の採点が大変と聞いてはいても、開校前には何とかなるのではないかと思っていた。職員室が一緒になって目の当りにすると、大量のテストを次の授業までに採点しなければならないのはやはり大変であり、成績にも関わってくるのが分かってきた。職員室が一緒になって初めて分かることが多い。現在、在籍している小学校は隣の中学校との連携を目指しているが、近くても学校の様子が全く見えない。</li> <li>・ (再掲) 一体化した分掌業務として転出入の様式を統一した。小学校の教務の方が進んでいてよかった。職員室が同じなので意思疎通が進んでうまくいった。職員室が分かれていたらうまくはいかなかった。扉一枚でもしきりがあると敷居は高い。</li> <li>・ (再掲) 保健担当として校外学習などで担当を交替することはあまりない。運動会は西校舎の保健室で対応したが、物の置いてある場所が分からないので東校舎に連れて行くこともあった。</li> <li>・ (再掲) 小学生が保健室に求めるニーズと、中学生が保健室に求めるニーズはかなり違う。やはり保健室は二つあり、別々の方がやりやすい。視察にいらした他市の小中一貫教育校の教員から保健室が一つと聞いて、大変だと思った。</li> <li>・ 小学校と中学校を一緒にして給食を出す上での工夫や取組について、1年生から9年生までの中で大きなくくりがある。小学生は1・2年生、3・4年生、5・6年生で分かれており、量の調整もしている。中学生は小学生よりも一品多くしたいところであるが、教員への配食も関係するので品数は増やさずに量で調整している。品数を増やせば小学校籍の教員と中学校籍の教員で食べるものが変わってしまうことになるので。教員は中学生の量で提供している。</li> <li>・ 小学校と中学校で別々の時は献立を別々に考えることができたので、一品多くしたり、小学生がいない時には中学校だけで考えることができたりした。小中一貫教育校になった時に食器の大きさを変えた。1年生から4年生までのものとそれ以上の学年用で大きさを揃えた。また食器の数も9種類に増やした。これは区内で一番多いのではないかな。</li> <li>・ 味付けや献立の配慮について、家庭では子供向けという配慮はない。献立を特に子供向けということで意識することはないが、例えば木の芽和えというようなメニューの場合は、1年生から4年生がいない時に出すといた配慮はしている。</li> <li>・ 1年生と9年生ではパンの大きさや給食の量が全く違う。交流給食では、普段は残してしまう子供も下の子がいるとがんばって食べている姿がある。</li> <li>・ 栄養指導の面で配慮していることとして、小学校だけだった時は6年生までで終わりであった。小中一貫教育校になり、子供の育ちがつながって9年間をみられるようになった。例えば、あの子供は嫌いなものが食べられるようにな</li> </ul>	<p>教員 (中学校)</p> <p>教員 (小学校)</p> <p>教員 (中学校)</p> <p>教員 (中学校)</p> <p>教員 (中学校)</p> <p>職員 (中学校)</p> <p>職員 (中学校)</p> <p>職員 (中学校)</p> <p>職員 (中学校)</p>

期待された効果	検証項目	内容	対象者
		ったということが分かる。また、西校舎に移って食が細くなったということも見て取れる。これは給食の時間が西校舎に行くとは短くなったからかと思う。食を通して子供たちの変化や育ちを見ることができる。声がけができる。	
		・ 食中毒や1年生から9年生までの子供がいることで、特に温度管理に配慮している。本校は調理室に冷房があり冷却器もあるので冷やすこともできる。校舎で給食時間が異なるので、時間差で作ったりする。給食の内容によっては小学生にだけ早く提供することがある。	職員（中学校）
		・ ゼリーなどは上の学年のものは冷蔵庫に入れてしまっておく。ギリギリまで冷やして出したい。設備的にできない学校も多い。	職員（中学校）
		・ 親子給食の方式と小中一貫教育校との違いについて、二つの釜があるので、低学年と高学年で分けている。和食は低学年の方に抵抗がある。小中一貫教育校になる前は小学校をメインに考えていた。小中一貫教育校になるとゴールは中学生である。栄養価の基準は中学生の方が脂質が多いので、量だけを変えても適正な栄養価比率とならない。同じ学校なので献立は同じと考えると、量だけで調節することが難しい。給食費は小学校の3段階と中学校で4段階になっている。中学校籍の教員からは品数を増やして欲しいとの要望はあるが、品数を増やすと一人当たりの量が少なくなり、低学年の子供たちは給食を適量で配ることが難しくなって大変である。学年によって食材を切る大きさを変えるなどの配慮をしている。ポウルに入っているものを分けて配るのは、低学年の子供にとっては難しいので、配りやすいものを考えている。	職員（小学校）
		・ 給食の出し方にしても、例えば冷やしうどんであれば、麺、野菜、つゆとなるが、低学年だと麺と野菜と一緒に出している。5・6年生は給食の時間が短いうえ、専科の授業で東校舎の端にある理科室などからの移動が長く大変である。	職員（小学校）
		・ 開校2年前から給食が業務委託になった。今年度は委託業者が変わった。小学校が休みの場合でも中学校の給食がある場合もある。	職員（小学校）
		・ 教職員の給食について、全教職員が中学校の給食費の金額を支払い、中学校の給食を食べている。中学生に一品多く付けたくても、小学校籍の教員が小学生と一緒に教室で食べることを考えると、品数は変えられない。小中一貫教育校では同じ品数にして量で調整することになる。段階をどうやってつくるか課題である。	職員（小学校）
		・ 小学校と中学校では規格が違うものがあり、階段の高さや跳び箱の高さも違っている。この学校は二つの学校がつながっているため、施設面ではゆとりがある。また、教員たちは小中学校で仲がよいので、道具や場所などの融通が利き、互いに貸し合ったりできる。	教員（小学校）
		・ 7～9年生は生徒が増えている。これ以上増えると、教室増が必要になる。	教員（中学校）
		・ 工事費用は小学校と中学校で分けて配当されるが、分けて執行するのは難しい。サッカーゴールを塗装するのは小学校と中学校で同時にやるが、領収書を分けると分割予算ということになり法律に抵触するので、小学校か中学校かどちらか一方の予算にその都度割り振って処理している。	職員（小学校）
		・ 小中一貫教育校を作るうえで難しいところとしては、予算がないことである。小学校と中学校では階段の1段の高さ	職員（小学校）

期待された効果	検証項目	内容	対象者
		や黒板の高さも違う。自分は小学校担当なので、中学校のことは口出しできなかったが、いざできると5・6年生には黒板が高い位置にありすぎて使えなかった。結局縦がより長いものに作り変えた。西体育館も小学生の保護者が連れてくる4・5歳の子供たちが階段を上るのに危険だったため、スロープを作った。また、小さい子供だと手が挟まってしまうため、西校舎の昇降口のドアにゴムを貼った。	
		・ 区は予算がないということで、校長室など新しく作る場所だけを改築した。しかし教室は汚いままで、見学に来る人もいたので、学校配当予算で塗り替えたりタイルを替えたりした。これらは小分けに工事したが、大変だった。小中一貫教育校はお金をかけないでやるのは無理だと思う。校長が2・3階の渡り廊下を何度も要求したが、無理だった。	職員（小学校）
		・ 安全管理について、教員に安全点検をしてもらっているが、うまく回っているとはいえない。小学校は児童が小さいから安全点検をするのは当たり前だが、中学校は「何でやるの」という感じであった。校庭などは事務では気付かないところがある。	職員（小学校）
		・ 本校の給食室は他校に比べて釜が多く、6釜ある。このため、カレーや麻婆豆腐など辛さや刺激があるものは、学年で味を分けて提供している。小中一貫教育校になる前から、本校は小学校の給食室で作ったものを中学校に渡すことになっていた。小中一貫教育校になっても大きく変わることはなかった。小中一貫教育校になってからは、小中学校両方の教室に行って子供の様子を見られるようになった。	職員（中学校）
		・ 小中一貫教育校としてきれいにしたいという思いがあった。家庭科室を一つにして5～9年が使っているが、課題ではないか。第2理科室は来年の夏に増設する予定だが、5・6年生に対応するのだろうか。	職員（中学校）
		・ 開校前の親子給食（大泉学園桜小学校が親校、大泉学園桜中学校が子校）では、小・中学校を結ぶ扉は開かずの扉だった。隣同士だったが別の学校であり、交流はなかった。今は男子更衣室になっている所である配膳室の隣から給食を運んでいた。一時期、給食室からたばこを吸っている子供が見えた時代もあった。	職員（小学校）
		・ ランチルームはできれば西校舎にあるとよい。移動に時間がかかるので廊下を走って教員が駆けつけることになっている。	職員（小学校）
		・ 食器は1～4年と5～9年で分けている。施設改修で給食室に防火扉を入れた。給食室が200㎡以上ある場合は必要である。熱風保管庫も入れた。	職員（小学校）
		・ 小中一貫教育校の開校が決まった時はびっくりした。光が丘地域が選ばれると思っていた。小・中学校の校舎を結ぶ狭い通路をどうやって通るのだろうかと話をしてきた。	教員（小学校）
		・ 規模は小さくても7～9年生には理科室が二つあるべきだ。小中一貫教育校として三つ目の理科室が整備される予定だが、7～9年生では二つ使う。5・6年生が理科室を使う予定はない。	教員（中学校）
		・ 二人体制で二つの保健室は理想的である。対応しやすい。二人で相談できるし、協力できる。	教員（小学校）
⑦ 小中一貫教育の課題を解決し	通学区域制度の特例、学校		



期待された効果	検証項目	内容	対象者
推進するための 先導的な役割、通 学区と学校選 択制度、教育委員 会の役割	選択制度の特 例 小中一貫教 育校への支援 および小中一 貫教育の充 実・推進の状況		